3. 事業概要

(1) 常　設　展

常設展示室は全体で５室の構成となっている。第１室は「山梨の文学風土」と「樋口一葉」コーナー、第２室は「山梨出身ゆかりの作家と作品」、第３室は芥川龍之介コーナー、第４室は飯田蛇笏・飯田龍太記念室として年４回春夏秋冬に一部の資料の入れ替えを行っている。第５室は山梨出身・ゆかりの作家104名をジャンルごとに年２回入れ替えて紹介している。

以下の資料一覧には、令和４年３月８日（火）～令和４年11月30日（水）の間、常設展に出品した資料すべて掲載した（館内設備工事のため令和４年12月１日～令和５年４月30日まで臨時休館）。

第1室

期間限定公開

◆ 春の常設展　山梨の現代作家　保坂和志　会期３/８（火）～６/５（日）

写真パネル　保坂和志　愛猫と
保坂和志「プレーンソング」浄書原稿
保坂和志『プレーンソング』1990（平成２）年９月　講談社
保坂和志『草の上の朝食』1993（平成５）年８月　講談社
保坂和志『この人の閾』1995（平成７）年８月　新潮社
保坂和志『季節の記憶』1996（平成８）年８月　講談社
保坂和志『残響』1997（平成９）年６月　文藝春秋
保坂和志『生きる歓び』1997（平成９）年６月　文藝春秋
保坂和志『〈私〉という演算』1999（平成11）年３月　新書館
保坂和志『もうひとつの季節』1999（平成11）年４月　朝日新聞社
保坂和志『明け方の猫』2001（平成13）年９月　講談社
保坂和志『カンバセイション・ピース』2003（平成15）年７月　新潮社
保坂和志『途方に暮れて、人生論』2006（平成18）年４月　草思社
保坂和志『小説の誕生』署名本　2006（平成18）年９月 新潮社
保坂和志『猫の散歩道』署名本　2011（平成23）年２月　中央公論新社
保坂和志『魚は海の中で眠れるが鳥は空の中では眠れない』2012（平成24）年３月　筑摩書房
保坂和志『考える練習』2013（平成25）年４月　大和書房
保坂和志『未明の闘争』2013（平成25）年９月　講談社
保坂和志『朝露通信』2014（平成26）年10月　中央公論新社
保坂和志『ハレルヤ』2018（平成30）年７月　新潮社
保坂和志「夜明けまでの夜」原稿　個人蔵
「文學界」2019（平成31）年２月号
保坂和志『読書実録』2019（令和元）年９月　河出書房新社
保坂和志『猫がこなくなった』2021（令和３）年１月　文藝春秋
「群像」2022（令和４）年２月号

◆ 夏・秋の常設展　山梨の芥川賞・直木賞作家　会期６/７（火）～11/30（水）

小尾十三　芥川賞正賞の腕時計
李良枝　芥川賞正賞の懐中時計
李良枝「由熙」草稿
保坂和志「この人の閾」色紙　個人蔵
木々高太郎　直木賞正賞の懐中時計

山梨の文学風土

◆ 甲斐のうた（パネル展示）

酒折の宮／塩の山・差出の磯／都留の郡／甲斐の牧

◆ 甲州の紀行文

深草元政『身延道の記』元禄17年刊
荻生徂徠『徂徠集』巻之十五　元文元年序文「峡中紀行」収録
賀茂季鷹『富士日記』文政６年刊

◆ 甲府学問所　徽典館

乙骨耐軒「徽典館学頭勤務割」
乙骨耐軒「維心亨齋詩」三集上・下
甲府勤番支配宛　徽典館学頭任命通知書

◆ 国学を学んだ人々

萩原元克編『甲斐名勝志』天明３年９月刊
萩原元克「うまひとのとひきまさずばいたづらに庭の真萩はちりゆかましを」短冊
本居宣長点　辻守瓶「春十首」和歌

山梨出身・ゆかりの作家と作品

樋口一葉（ひぐち　いちよう）

樋口一葉「さゞれいしの昔よりして契りけん岩ねをめぐるたに河のみづ」短冊幅
樋口一葉「寄紅葉恋」（数詠補遺）軸装　1894（明治27）年11月22日
「文学界」1895（明治28）年１月〈復刻〉
樋口一葉　伊庭隆次宛書簡　1893（明治26）年４月24日〈複製〉
樋口一葉　感想・聞書９（残簡その三）巻子装
樋口一葉　古屋家宛書簡　1890（明治23）年10月13日
青海学校二級后期卒業證書
「武蔵野」第１輯　1892（明治25）年３月　今古堂
「武蔵野」第２輯〈復刻〉1892（明治25）年４月　今古堂
「武蔵野」第３輯〈復刻〉1892（明治25）年７月　今古堂
樋口一葉「たけくらべ」原稿〈複製〉
樋口一葉「闇桜」未定稿〈複製〉原本 台東区立一葉記念館
樋口一葉「ゆく雲」未定稿〈複製〉
樋口虎之助作　薩摩焼絵付皿（東海道五十三次）
短冊ばさみ
筆立て
こうがい・根掛け・筋立
新五千円札（A000006A番）
写真パネル　左から次兄・虎之助、父・則義、長兄・泉太郎
写真パネル　萩の舎集合写真
写真パネル　半井桃水
写真パネル　竹内桂舟 画「うもれ木」第７回挿絵
写真パネル　文学界同人
写真パネル　一葉女史碑建碑の日　1922（大正11）年10月15日

第２室

井伏鱒二（いぶせ　ますじ）

井伏鱒二「旧・笛吹川の趾地」原稿〈複製〉
井伏鱒二「はるのねざめのうつゝできけばとりのなくねでめがさめました」軸装
映画「黒い雨」ポスター　1989（平成元）年　東映
井伏鱒二「さびしい庭にまつかさおちてとてもおまへはねにくうござろ」色紙

井伏鱒二「あきのおんたけ　こゝのつどきに　ひとりのぼれば　はてなきおもひ」軸装
井伏鱒二「はなにあらしのたとへのあるぞ　さよならだけが人生だ　花発多風雨　人生是別離」軸装
井伏鱒二「仲秋明月」軸装〈複製〉
井伏鱒二「頓生菩提」原稿〈複製〉
井伏鱒二「船津村の窯址」原稿
井伏鱒二「老僕のゐる風景」原稿〈複製〉
井伏鱒二 画　絵付け皿
井伏鱒二『厄除け詩集』1937（昭和12）年５月　野田書房
井伏鱒二『黒い雨』1966（昭和41）年10月　新潮社
白根 美代子 画『トートーという犬』挿絵原画
井伏鱒二『トートーという犬』1988（昭和63）年７月　牧羊社
写真パネル　太宰治の御坂峠の文学碑を見にいく井伏

太宰　治（だざい　おさむ）

太宰治「ヴィヨンの妻」原稿〈複製〉
太宰治「斜陽」草稿〈複製〉
太宰治御坂峠文学碑「富士には月見草がよく似合ふ」拓本軸装
太宰治『晩年』1936（昭和11）年６月　砂子屋書房
太宰治『女生徒』1939（昭和14）年４月　砂子屋書房
太宰治『富嶽百景』1943（昭和18）年１月　新潮社
太宰治『ヴィヨンの妻』1947（昭和22）年８月　筑摩書房
太宰治　井伏鱒二宛書簡　1938（昭和13）年10月25日消印〈複製〉
太宰治　高田英之助宛書簡　1939（昭和14）年１月17日〈複製〉
太宰治　井伏鱒二宛書簡　1941（昭和16）年６月25日〈複製〉
太宰治　御坂峠文学碑「富士には月見草がよく似合ふ」原稿〈複製〉
井伏鱒二　津島美知子宛書簡　1952（昭和27）年12月１日
太宰治「我が名はせまき門の番卒」色紙
田邊茂一「太宰君の死」原稿
河上徹太郎「太宰御坂に鎮まるの日」色紙
太宰治「人間失格」原稿〈複製〉原本 日本近代文学館蔵
写真パネル　甲府市水門町（現・朝日１丁目）の石原家玄関横で　1939（昭和14）年元旦

檀　一雄（だん　かずお）

檀一雄「太郎生後九十四日」額装〈複製〉
檀一雄「微笑」（『火宅の人』第１章）原稿〈複製〉
檀一雄「旅立ち」原稿〈複製〉
檀一雄『リツ子・その愛』『リツ子・その死』1950（昭和25）年４月　作品社
檀一雄『火宅の人』特装本　1979（昭和54）年６月　新潮社
映画「火宅の人」ポスター　1986（昭和61）年　東映
玉井徳太郎 画『少年猿飛佐助』挿絵原画
檀一雄「恋と吹雪と砲弾」草稿
檀一雄「痩せ脛の尚よろけ行く秋の風」一枚物
檀一雄 筆・画「行く夏を何か惜まむ遠花火」一枚物　1971（昭和46）年７月25日
写真パネル　能古島の草庵「月壺洞」にて　1975（昭和50）年

山本周五郎（やまもと　しゅうごろう）

山本周五郎『山彦乙女』1952（昭和27）年２月　朝日新聞社
清水きよし「酔漢とその細君」草稿〈複製〉
村上幽鬼「染血桜田門外」草稿〈複製〉
山本周五郎「青べか物語　毒をのむと苦しい」原稿
和泉比呂詩「五月の野辺」草稿〈複製〉
山本周五郎「青べか物語」原稿〈複製〉

山本周五郎『樅ノ木は残った』1969（昭和44）年８月　講談社
山本周五郎『赤ひげ診療譚』1959（昭和34）年２月　文藝春秋新社
映画「赤ひげ」パンフレット　1965（昭和40）年　東宝
山本周五郎「わが野鳥たち」原稿〈複製〉
映画「赤ひげ」ポスター
映画「椿三十郎」ポスター
写真パネル　映画館にて　撮影 秋山青磁
写真パネル　書斎　間門園にて　撮影 秋山青磁

深沢七郎（ふかさわ　しちろう）

深沢七郎「笛吹川」草稿〈複製〉
深沢七郎『笛吹川』1958（昭和33）年４月　中央公論社
映画「笛吹川」シナリオ
横尾忠則 画　夢屋ポスター
深沢七郎「花に舞う」原稿
深沢七郎「言わなければよかったのに日記」原稿〈複製〉
深沢七郎「ろまんさ」原稿
高橋忠弥 画「ろまんさ」挿絵原画
深沢七郎「舞台再訪」原稿
写真パネル　夢屋にて　撮影 佐藤真樹
写真パネル　ギターリストの頃

山崎方代（やまざき　ほうだい）

山崎方代「ふるさとの右左口邨は骨壺の底にゆられて吾が帰る村」軸装
山崎方代「宿無しの吾の眼玉に落ちてきてどきりと赤い一ひらの落葉」色紙
山崎方代「しのゝめの下界に降りて来たる時石の笑いを耳にはさみぬ」短冊
山崎方代「茶ぶ台の上の土瓶に心中をうちあけてより楽になりたり」短冊
山崎方代「泣くほかに支えしものが無いゆえにぬば玉の夜をこめて泣きたり」軸装
山崎方代「おそろしきこの夜の山崎方代を鏡の奥につき落とすべし」軸装
山崎方代「なまよみの甲斐の源氏の末なればゆみ取の弓高くあげなむ」軸装
山崎方代「朴の木を一本植えてかりそめの生命があらば待ちくらすかな」短冊
山崎方代「大きな波が寄せて来る大きな笑いが笑い出したり」短冊
山崎方代「右の瞳をつむりて弓の糸を引く蛙のごとき晩年なりき」短冊
山崎方代「榧の木は苗のうちより名木のそしりを受けて伸びてゆくなり」色紙
山崎方代「フランソワ・ヴィヨンの詩鈔をふところに一ツ木町を追われゆくなり」色紙
山崎方代「詩一つ」額装
山崎方代「茶碗の底に梅干の種が二つ竝びをるこれが愛というものだ」軸装
山崎方代「ほんとうの酒がこの世にあつた時父もよいにき吾もよいたり」短冊
山崎方代「やぶかげの石の仏もゆく長谷の春をおしみて涙こぼせり」短冊
山崎方代「山さくら花の盛りとなりにけり鎌倉山の春深くして」短冊
愛用品　万年筆
山崎方代『方代』1955（昭和30）年10月　山上社
山崎方代『右左口』1973（昭和48）年12月　短歌新聞社
山崎方代『こおろぎ』1980（昭和55）年11月　短歌新聞社
山崎方代『青じその花』1981（昭和56）年12月　かまくら春秋社
山崎方代『迦葉』1985（昭和60）年11月　不識書院
フランソワ・ヴィヨン『ヴィヨン詩鈔』山崎方代旧蔵〈複製〉
写真パネル　方代艸庵にて　撮影 湯川晃敏

中村星湖（なかむら　せいこ）

中村星湖「少年行」原稿〈複製〉
中村星湖『少年行』現代代表作叢書第12篇　1915（大正４）年10月　植竹書院

中村星湖「飛ぶ鳥にかゝはらす立つ案山子かな」短冊
中村星湖『うら富士雑話Ⅰ』草稿
中村星湖『西湖の鱒』草稿
中村星湖『ボヴリイ夫人』1916（大正５）年６月　早稲田大学出版部
中村星湖「魚の番人」原稿
「赤い鳥」第７巻第５号　1921（大正10）年11月

前田　晁（まえだ　あきら）

田山花袋筆「文章世界」創刊号立案〈複製〉
コナン・ドイル 作　前田晁 訳「三代目」原稿
前田晁『明治大正の文学人』1942（昭和17）４月　砂子屋書房
小出楢重　画「文章世界」表紙原画〈複製〉
前田晁『少年国史物語』原稿〈複製〉
前田晁「クオレ」について講演原稿４
エドモンド・デ・アミーチス作　前田晁訳『クオレ』1921（大正10）年６月３版　精華書院

三井甲之（みつい　こうし）

「アカネ」創刊号表紙原稿　1908（明治41）年２月〈複製〉
愛用のインク壺
三井甲之「行く春」原稿
「アカネ」第１巻第５号　1908（明治41）年６月
長塚節　三井甲之宛書簡　1908（明治41）年（推定）１月８日〈複製〉

中里介山（なかざと　かいざん）と山梨

安岡章太郎「果てもない道中記」原稿（８）
安岡章太郎「果てもない道中記」原稿（９）
中里介山「大菩薩峠　他生の巻」原稿〈複製〉原本　日本近代文学館蔵
中里介山『大菩薩峠』1918（大正７）年11月　玉流堂
中里介山『大菩薩峠　形訳脚本』1932（昭和７）年12月　大菩薩峠刊行会
新国劇「大菩薩峠」パンフレット
『石井鶴三挿絵集』第１巻　1934（昭和９）年11月　光大社

伊藤左千夫（いとう　さちお）と山梨の歌人たち

神奈桃村「紫芋をかこひ穴よりとりいたし芽あるとなしを選りわけるかも」短冊
神奈桃村「岩窟に安置されたる百体の石の看音見てまわりけり」短冊
岡千里「落椿地上にあそび居たりける青鵐のつがひ枝に上れり」短冊
伊藤左千夫　岡千里宛葉書　1906（明治39）年８月３日消印
日原無限「時雨空霽れなむとする雲の色彼の雲の色よ君が心に」一枚物
伊藤左千夫　岡千里宛書簡　1911（明治44）年12月11日
神奈桃村　新免一五坊宛葉書　年月日不明
岡千里「あかつきを囀りそめて落椿地上に赤くぬれにゐれたり」短冊
伊藤左千夫　三井甲之宛書簡　1905（明治38）年（推定）11月21日
神奈桃村「神奈桃村日記」第１号　1906（明治39）年１月１日～12月30日
神奈桃村「神奈桃村日記」第２号　1916（大正５）年10月15日～1922（大正11）年２月28日
神奈桃村「神奈桃村日記」第３号　1906（明治39）年３月15日～1924（大正13）年11月19日
日原無限ほか「甲斐楓會（題苔）」原稿
「馬酔木」第３巻第２号　1906（明治39）年２月
「馬酔木」第３巻第６号　1906（明治39）年10月〈復刻〉
【全国文学館協議会　第10回　共同展示　3.11文学館からのメッセージ】
神奈桃村日記に見る関東大震災「神奈桃村日記」第３号から　1923（大正12）年９月

秋山秋紅蓼（あきやま　しゅうこうりょう）

秋山秋紅蓼「俳句四格調の説―自由律の限界と新表現の設定」原稿〈複製〉
秋山秋紅蓼「自由律精神について」原稿
秋山秋紅蓼「牡丹」原稿
秋山秋紅蓼「番町屋敷町」原稿
秋山秋紅蓼「葡萄礼讃」原稿
秋山秋紅蓼「うめの花枝にひらきかほり来るあさ」短冊
秋山秋紅蓼　スケッチブック　1958（昭和33）年６月２日　画「鉄線花」ほか
秋山秋紅蓼　花の画一枚物　1959（昭和34）年
秋山秋紅蓼「柘榴」素描

田中冬二（たなか　ふゆじ）と山梨

田中冬二『青い夜道』1929（昭和４）年12月　第一書房
田中冬二　深沢正志宛書簡　1964（昭和39）年４月９日〈複製〉
田中冬二「秋の匂い」色紙
田中冬二「薬師寺秋思」解説草稿
田中冬二「ウヰスタリア」草稿１
田中冬二「裾花川の瀬音―詩人津村信夫の思い出―」原稿
田中冬二「夏山のかぶさつてゐる小駅かな」短冊
田中冬二「春燈下踊り子靴をはき替ふる」一枚物
田中冬二「もうぢき春が来る」草稿
田中冬二「春愁を赤きポストに投函す」他一枚物

木々高太郎（きぎ　たかたろう）

木々高太郎「笛吹―或るアナーキストの死」草稿〈複製〉
木々高太郎『笛吹』1948（昭和23）年３月　世界社
木々高太郎「初志」原稿
木々高太郎『人生の阿呆』1936（昭和11）年７月　版画荘
「文藝春秋」第15巻第３号　1937（昭和12）年３月
木々高太郎「花笛」原稿
木々高太郎「文学に於ける実感に就いて」原稿
海野十三　木々高太郎宛書簡　1936（昭和11）年12月19日
林髞『頭のよくなる本』（カッパ・ブックス）1960（昭和35）年10月25日９版　光文社

小尾十三（おび　じゅうぞう）

小尾十三「母への反抗時代」原稿〈複製〉
小尾十三「親子だるま」原稿
小尾十三「草原の夢」楽譜
小尾十三『ひとりっ子の父』1981（昭和56）年10月　第三文明社
小尾十三「からすの親子」草稿
小尾十三「しつけ糸」原稿
小尾十三『雑巾先生』1945（昭和20）年２月　満洲文藝春秋社
小尾十三『雑巾先生』1945（昭和20）年２月　満洲文藝春秋社〈復刻〉

村岡花子（むらおか　はなこ）

村岡花子「赤毛のアン」第３章翻訳原稿〈複製〉
村岡花子「赤毛のアン」第５章翻訳原稿〈複製〉
村岡花子『赤毛のアン』1952（昭和27）年５月　三笠書房
モンゴメリ『ANNE OF GREEN GABLES』〈複製〉
映画「赤毛のアン」リーフレット「アンの結婚」
映画「赤毛のアン」パンフレット　1986年　カナダ映画
村岡花子「弁天池―K夫人のことども―」原稿
村岡花子「子どものことば」原稿
村岡花子『心の饗宴』1941（昭和16）年４月　時代社

徳永寿美子（とくなが　すみこ）

徳永寿美子「小公子」原稿
徳永寿美子「小公子」原稿〈複製〉
徳永寿美子『小公子』1948（昭和23）年５月　広島図書
徳永寿美子『フランダースの犬』1965（昭和40）年12月　盛光社
徳永寿美子『薔薇の踊り子』1921（大正10）年２月　アルス〈複製〉
徳永寿美子「茂ちゃんのしっぱい」草稿１
徳永寿美子「先頃、京都の同志社女子大生十二人が…」草稿
徳永寿美子「子ばとのぽうちゃん」草稿
徳永寿美子『うさぎのせんたくや』1966（昭和41）年10月　金の星社
「母」第６年第８号〈複製〉

八木義徳（やぎ　よしのり）と山梨

「満洲観光聯盟報」第５巻第６号　1941（昭和16）年６月
八木義徳『風祭』1976（昭和51）年８月　河出書房新社
八木義徳「花盛りの一日」原稿
八木義徳「處女作の思ひ出」原稿
八木義徳「よく使われている。…」原稿
八木義徳「文章は血と土とそして海の風から生れる」色紙
『八木義徳全集』第４巻　1990（平成２）年６月　福武書店　妻正子に宛てた献辞入
『八木義徳全集』第５巻　1990（平成２）年７月　福武書店　妻正子に宛てた献辞入

武田泰淳（たけだ　たいじゅん）と山梨

武田泰淳「富士」第９回　原稿〈複製〉
武田泰淳『富士』特製愛蔵本　1972（昭和47）年10月　中央公論社
司修『富士』挿絵原画エッチング
武田泰淳「いりみだれた散歩」原稿
武田泰淳「聖女侠女」原稿
「ひかりごけ」映画パンフレット
「海」第１巻第５号　1969（昭和44）年10月

李　良枝（イ・ヤンジ）

愛用の筆筒・文具
李良枝「由熙へ」草稿
李良枝「私の『ゲーテとの対話』」草稿
「文藝春秋」第67巻第３号　1989（平成元）年３月
李良枝「ナビ・タリョン」草稿
李良枝「あにごぜ」草稿
李良枝「石の聲」第２章草稿
李良枝『石の聲』1992（平成４）年９月　講談社
ソウル大学卒業証書　1988（昭和63）年２月26日

辻　邦生（つじ　くにお）と山梨

「海」創刊特大号 1969（昭和44）年７月
辻邦生「ある生涯の七つの場所　祭の果て」原稿
辻邦生「埴谷雄高氏との出会い」原稿
辻邦生『背教者ユリアヌス』1972（昭和47）年10月　中央公論社
辻邦生『銀杏散りやまず』1989（平成元）年９月　新潮社
辻邦生　高室陽二郎宛書簡　1989（平成元）年11月４日
文学座公演「天使たちが街をゆく」パンフレット
辻邦生「君を夏の一日に喩えようか　シェイクスピア「ソネット」の一部　吉田健一訳」色紙

第3室　芥川龍之介

詩人・萩原朔太郎（1886～1942）の歿後80年を記念して出身地・前橋市の前橋文学館の発案で、各地の文学館による同時期の共同展示「萩原朔太郎大全2022」に参加。10月14日（火）～11月30日（水）まで、芥川龍之介コーナーに、芥川宛萩原朔太郎書簡（1927年１月頃）を展示した。

【大川の水（誕生・少年期）】

伯母のふきが使った長唄稽古本
「牛乳の用法」パンフレット　1904（明治37）年11月　耕牧舎
芥川龍之介「義仲論」原稿
写真パネル　実父・新原敬三
写真パネル　養父・芥川道章
写真パネル　実母・ふくと龍之介
写真パネル　左から養母・とも　伯母・芥川ふき　叔母・新原ふゆ

【空中の火花（文壇登場）】

菅虎雄筆「我鬼窟」扁額〈複製〉
芥川龍之介「鼻」草稿〈複製〉
「新思潮」創刊号　1916（大正５）年２月
芥川龍之介「葬儀の記」原稿〈複製〉
芥川龍之介「秋」草稿
芥川龍之介『傀儡師』1919（大正８）年１月　新潮社
芥川龍之介『点心』1922（大正11）年５月　金星堂
芥川龍之介『支那游記』1925（大正14）年11月　改造社
写真パネル　左から久米正雄、松岡譲、龍之介、成瀬正一
写真パネル　餓鬼窟で。1921（大正10）年　南部修太郎
写真パネル　中国服を着た龍之介と竹内逸三

【ぼんやりした不安（苦悩と死）】

芥川龍之介筆「澄江堂十首」巻子〈複製〉原本 天理大学附属天理図書館蔵
『近代日本文藝読本』全５巻　1925（大正14）年11月　興文社
芥川龍之介『湖南の扇』1927（昭和２）年６月　文藝春秋社出版部
芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な」原稿〈複製〉
芥川龍之介「或阿呆の一生」原稿〈複製〉
写真パネル　1927（昭和２）年５月24日「現代日本文学全集」（改造社）の宣伝講演会を行った新潟高等学校で
写真パネル「時事新報」1927（昭和２）年７月25日

【書画の魅力】

芥川龍之介　石川寅吉宛書簡　1924（大正13）年３月８日
芥川龍之介筆　素描「亀」
芥川龍之介画･筆「抱虚懐欲歩古今」額装
芥川龍之介画　水彩画　男の肖像
芥川龍之介筆　朝鮮半島の地図
芥川龍之介　小穴隆一宛書簡軸装　1922（大正11）年７月９日
小穴隆一装幀『黄雀風』表紙校正刷り
芥川龍之介『黄雀風』1924（大正13）年７月　新潮社
芥川龍之介　池崎忠孝宛書簡　1917（大正６）年３月５日

【芥川の俳句】

芥川龍之介「黒南風の大うみ凪げるたまゆらや」ほか俳句草稿
芥川龍之介「沼のべの柳もぞろと霞みけり」ほか俳句草稿
芥川龍之介「札白し牡丹畑の夕あかり」ほか俳句草稿
芥川龍之介「喇嘛寺のさびしさつげよ合歓の花」ほか俳句草稿
芥川龍之介「荘厳の甍に暮れよ合歓の花」ほか俳句草稿
芥川龍之介「炎天や蝶をとめたる馬の糞」ほか俳句草稿
芥川龍之介「ゆれ落つる月の赤さよ槍が嶽」他俳句草稿
芥川龍之介「雁啼くや芥火燃ゆる裏河原」「仇めきたる暮露のものごし」ほか連句草稿
芥川龍之介「紙巻の煙の垂るる夜長かな」ほか俳句草稿
芥川龍之介「みぞるるや犬の来てねる炭俵」ほか俳句草稿
芥川龍之介　飯田蛇笏宛書簡　1923（大正12）年12月１日〈複製〉
飯田蛇笏　芥川龍之介宛書簡　1926（昭和元）年12月29日〈複製〉
「雲母」第13巻第９号　1927（昭和２）年９月
『澄江堂句集』1927（昭和２）年12月　文藝春秋社

【芥川と山梨】

芥川龍之介「藤の花軒端の苔の老いにけり」軸装〈複製〉
芥川龍之介「水虎晩帰之図」軸装〈複製〉
芥川龍之介　山本喜誉司宛書簡　1910（明治43）年10月14日〈複製〉
芥川龍之介　山梨夏期大学講演メモ〈複製〉
堀内柳南「コスモスを揺して月に来る人」軸装
堀内柳南「虫なき出し夕くれの母の言葉」軸装

【羅生門】

芥川龍之介「羅生門」関連ノート〈複製〉
「帝国文学」 第21巻第10号　1915（大正４）年11月〈復刻〉
芥川龍之介『羅生門』1917（大正６）年５月　阿蘭陀書房
芥川龍之介『鼻』1918（大正７）年７月　春陽堂

【友への手紙】

芥川龍之介　井川恭宛書簡　1914（大正３）年１月21日〈複製〉原本 大阪公立大学資料室蔵

【夏目漱石の手紙】

夏目漱石　久米正雄・芥川龍之介宛書簡　1918（大正７）年８月21日〈複製〉

【芥川と児童文学】

芥川龍之介　鈴木三重吉宛書簡　1919（大正８）年11月９日〈複製〉
「赤い鳥」創刊号　1918（大正７）年７月
芥川龍之介「蜘蛛の糸」原稿〈複製〉
芥川龍之介『三つの宝』1928（昭和３）年６月　改造社

愛用の水泳帽
「文藝春秋」創刊号 1923（大正12）年１月
『芥川龍之介全集』（1934年岩波書店）予約募集の凸版
愛用のペーパーナイフ
自筆俳句入扇面「明星のちろりにひびけほととぎす」

第4室　飯田蛇笏・飯田龍太記念室

【境川村小黒坂】

パネル　山梨県内の地図
飯田蛇笏・飯田龍太使用の硯
飯田家家相図　1899（明治32）年

【飯田蛇笏】

飯田蛇笏「行くほどにかげろふ深き山路哉」軸装
飯田蛇笏「月光に花梅の紅ふるゝらし」軸装
飯田蛇笏「春ぬくゝ野の禽桑をのぼりけり」短冊
飯田蛇笏「雲遠き塔に上りて春をしむ」軸装
飯田蛇笏「夏山や又大川にめぐりあふ」軸装
飯田蛇笏「水あかりでゝ虫巌を落ちにけり」額装
飯田蛇笏「素裸に熟睡したる籐椅子哉」短冊
飯田蛇笏「河童に梅天の亡龍之介」短冊
飯田蛇笏「山ふかき飛瀑をのぼる大揚羽」色紙
飯田蛇笏「鐵のあきの風鈴鳴りにけり」軸装
飯田蛇笏「秋しばし寂日輪をこずゑかな」軸装
飯田蛇笏「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」短冊
飯田蛇笏「山吹の落葉し尽す露の川」色紙
写真パネル　早稲田大学時代の蛇笏
飯田蛇笏「いもの露連山影を正しうす」額装　1914（大正３）年〈複製〉原本 個人蔵
飯田蛇笏「魂のたとへばあきの蛍かな」額装〈複製〉1927（昭和２）年
写真パネル　家族と庭前で　1917（大正６）年撮影
「ホトトギス」第12巻第１号　1908（明治41）年10月「俳諧散心号」〈複刻〉
「俳句欄」（「国民新聞」）切り抜き
「ホトトギス」1914（大正３）年11月「芋の露」巻頭号〈パネル〉
「キララ」創刊号　1915（大正４）年５月〈複製〉原本 東京都近代文学博物館蔵
「キララ」第２号　1915（大正４）年６月〈複製〉原本 東京都近代文学博物館蔵
「キララ」第３巻第11号　1917（大正６）年11月〈複刻〉
「雲母」10周年記念号　1924（大正13）年３月〈複刻〉
三好達治　飯田蛇笏宛書簡　1949（昭和24）年３月10日
飯田蛇笏『山廬集』1932（昭和７）年12月　雲母社
飯田蛇笏『山廬集』序文原稿〈複製〉
飯田蛇笏『霊芝』1937（昭和12）年６月　改造社
飯田蛇笏『山響集』1940（昭和15）年10月　河出書房
飯田蛇笏『白嶽』1943（昭和18）年２月　起山房
飯田蛇笏『心像』1947（昭和22）年11月　靖文社
飯田蛇笏「心像」原稿〈複製〉
飯田蛇笏『春蘭』1947（昭和22）年７月　改造社
飯田蛇笏『穢土寂光』1936（昭和11）年12月　野田書房
飯田蛇笏『雪峡』1951（昭和26）年12月　創元社
飯田蛇笏 句集『雪峡』句稿〈複製〉
「雲母」復刊号 1946（昭和21）年３月
写真パネル　飯田龍太撮影　炉辺の蛇笏　1956（昭和31）年１月撮影
飯田蛇笏「おく霜を照る日静かに忘れけり」軸装　1953（昭和28）年〈複製〉原本　個人蔵
飯田蛇笏「御魂祭折から月の上るなり」短冊　1961（昭和36）年〈複製〉原本 個人蔵
写真パネル　1958（昭和33）年４月８日、門前を歩く蛇笏と龍太・小林富司夫　撮影 若林賢明
飯田蛇笏『家郷の霧』1956（昭和31）年11月　角川書店
「雲母」1962（昭和37）年10月　蛇笏遺句「山月」掲載
「雲母」1962（昭和37）年11月号　龍太「山廬永別」掲載

「雲母」飯田蛇笏特集号　1963（昭和38）年３・４月
飯田蛇笏『椿花集』1966（昭和41）年５月　角川書店
高浜虚子「山廬」扁額〈複製〉
落款印・印譜
高浜虚子『進むべき俳句の道』1918（大正７）年７月　実業之日本社
前田普羅「山桃の日かげと知らで通りけり」短冊
前田普羅「色かへて夕となりぬ冬の山」短冊〈複製〉
村上鬼城「花ちるや耳ふつて馬のおとなしき」色紙
原石鼎「満ちしほにすでに灯つらね川開」短冊
渡辺水巴「何の木か梢そろへけり明の春」短冊
渡辺水巴「土雛はむかし流人や作りけん」色紙
西島麥南「葉桜に風雨の蝶をみたりけり」短冊
西島麥南「秋思あり莨火風に燃えやすく」短冊
石原舟月「春惜みつつ風交のしづかにも」短冊
石原舟月「夕千鳥漁港の雪となりにけり」短冊
宮武寒々「彼岸西風炎の如く塔登る」短冊
中川宋淵「たらちねの生れぬ前の月明り」短冊
松村蒼石「惜春あはあはと年とり過ぎぬ」短冊
松村蒼石「郭公やわが詩つひにひそかなる」短冊
高室呉龍「竹藪のすこしそよけど夏霞」短冊
高室呉龍「老蟷螂あるきて広き庭に出つ」短冊
高橋淡路女「走馬燈こころに人をまつ夜かな」短冊
高橋淡路女「羽織きて二十三夜の女かな」短冊
柴田白葉女「山の雨やみ冬椿濃かりけり」短冊

【飯田龍太】

飯田龍太「満月に目をみひらいて花こぶし」軸装
飯田龍太「あるときはおたまじやくしが雲の中」軸装
飯田龍太「黒猫の子のぞろぞろと月夜かな」色紙
飯田龍太「千里より一里が遠き春の闇」色紙
飯田龍太「雪月花わけても花のえにしこそ」額装
飯田龍太「紺絣春月おもく出てしかな」軸装
飯田龍太「夕焼けて夏山おのが場にそびゆ」軸装
飯田龍太 筆　吉岡堅二 画　飯田龍太賛「かたつむり甲斐も信濃も雨の中」額装
飯田龍太「遠くまで諸葉のそよぐ夏景色」軸装
飯田龍太「炎天のかすみをのぼる山の鳥」色紙
飯田龍太「山起伏して乱れなき大暑かな」色紙
飯田龍太「遠くまで海揺れてゐる大暑かな」原稿
朝井閑右衛門 画「蛇笏・達治・龍太」像
飯田龍太「去るものは去りまた充ちて秋の空」軸装
飯田龍太「返り花咲けば小さな山のこゑ」色紙
飯田龍太「白雲のうしろはるけき小春かな」軸装
飯田龍太　貼り交ぜ屏風〈複製〉
写真パネル　甲府中学５年　1937（昭和12）年、1938年頃
写真パネル　百戸の谿口絵写真
「雲母」1951（昭和26）年６月「紺絣」巻頭号
飯田龍太『童眸』1959（昭和34）年３月　角川書店
飯田龍太『麓の人』1965（昭和40）年11月　雲母社　雲母叢書第29篇
飯田龍太『忘音』1968（昭和43）年11月　牧羊社「現代俳句十五人集」第１巻
『忘音』月報
飯田龍太「一月の川一月の谷の中」軸装〈複製〉
「俳句」1969（昭和44）年２月号

飯田龍太『春の道』1971（昭和46）年10月　牧羊社
愛用の釣り竿
井伏鱒二ほか幸富講寄せ書き「龍太氏給与のヤマメを食ひ広瀬三郎君の病気回復を祝ふ」
1970（昭和45）年秋〈複製〉
写真パネル　山廬庭前にて　撮影　斉藤勝久　提供 角川学芸出版
飯田龍太　句集『山の木』草稿
飯田龍太『山の木』1975（昭和50）年４月30日　立風書房
飯田龍太『涼夜』1977（昭和52）年９月　五月書房和装本シリーズの１巻、限定400部
飯田龍太「今昔」草稿
飯田龍太『今昔』1981（昭和56）年11月　立風書房
飯田龍太『山の影』1985（昭和60）年７月　立風書房
飯田龍太『俳句遠近』1986（昭和61）年12月20日　富士見書房
飯田龍太『山居四望』1984（昭和59）年10月21日　講談社
飯田龍太『俳句今昔』1988（昭和63）年７月30日　富士見書房
飯田龍太『遲速』原稿コピー
飯田龍太『遲速』1991（平成３）年12月　立風書房
飯田龍太「『雲母』の終刊について」原稿（写し）
飯田龍太「『新編雲母句集』について」原稿
「雲母」1992（平成４）年７月
「雲母」終刊号　1992（平成４）年８月
飯田龍太「『新編雲母句集』について」原稿
『新編雲母句集』1992（平成４）10月10日　900号号外
飯田龍太『紺の記憶』1994（平成６）年７月20日　角川書店
飯田龍太『遠い日のこと』1997（平成９）年６月20日　角川書店
飯田龍太「旅・歳時記　四月」原稿
飯田龍太「旅・歳時記　五月」原稿
飯田龍太「雲母の十五作家」原稿
「俳句」1967（昭和42）年８月
飯田龍太「碑のことなど」原稿
飯田龍太「なにはともあれ山に雨山は春」扇面額装〈複製〉
飯田龍太　自句自解「なにはともあれ山に雨山は春」原稿
飯田龍太　自句自解「遠くまで海揺れてゐる大暑かな」原稿
落款印
印譜
のむら清六「雲母」表紙原画「メロン」額装
「雲母」1975（昭和50）年９月
愛用カメラ　二眼レフ（革カバー）
写真パネル　村の女性・村の農家・村の風景・狐川畔　撮影 飯田龍太
写真パネル　狐川上流　撮影 飯田龍太